

技術の意義を再認識し、活性化へ

水、空気、安全の存在が当然のこととして、それらの有り難味が特別には意識されないのと同じように、生まれた時から携帯電話があるような、技術にどっぷり浸かり、技術の存在を忘れていて、場合によっては軽視するような社会的な空気が感じられる昨今です。

国土が狭く、資源が限られたわが国は、技術の創造に立国の活路を見出し、技術の研究・開発に努め、適正な評価のもとで成長を遂げてきましたが、それを忘れたための技術、製造業の軽視からか、“安ければ良いといったデフレ感が蔓延”している感があります。

今こそ、国の威力、活力の源泉は何かをよく考えることが必要ではないでしょうか。つまり、国が保有する技術の水準及びそれにより具現化される創出物は、国威を評価する一つの尺度になります。ここで、国威とは国の存在感を示すシンボルとなるものであり、卑近な例ではノーベル賞の受賞であり、オリンピックの金メダルの獲得であり、それにより国の科学技術や身体的能力の水準に対して、諸外国から相応の評価が得られ、国民が自国に対して自信、希望を持つことができ、活力の源にも成り得るものです。従って、“**技術は国威のひとつ**”と言えるでしょう。

建設分野でも同様であり、技術の研究・開発・普及は、単に新たな技術を生み出すだけでなく、

それらを通じて、個人、その所属組織、さらには行政機関が、社会基盤の整備、保全に対する真摯な気持ちを保持し、高揚させて、結果的に社会に貢献する、対外的に国威を示す、活力を生み出す、といった効用があるでしょう。重厚長大とは言え、明石海峡大橋、東京湾アクアライン、関西国際空港、新幹線などが、そうであるように。現在は非常に厳しい時期ではありますが、技術の研究・開発・普及の意義を理解し、真摯に取り組む個人、組織には、どこか活気、活力、希望が感じられるので、“**技術は活力源**”と言えましょう。

従って、日本の将来の活力を考えても、建設技術の研究・開発・普及は、きちんと認識して絶え間なく進めることが必要でしょう。“**デフレ型社会資本整備は将来の禍根**”であるので、そうならないためには、技術の研究・開発・普及の必要性が、国民を含めて幅広く認識されるとともに、開発技術を適性に評価し、それを実効させる仕組みが必要でしょう。既に、総合評価入札方式、NETIS（新技術情報提供システム）、CPDS（継続的専門能力啓発システム）などの新たな取り組みが実施されつつありますが、単に事務的、限定的に行うだけではなく、その底流では、技術、技術者、技術の保有機関を尊重し、適正に評価し、支援するといった心配りや決断が必要でしょう。これも“**人へ**”の一つであり、“**技術は人なり**”でしょう。

大阪大学大学院 工学研究科
地球総合工学専攻 教授

とき た けん いち
常 田 賢 一



技術は目標を実現する道具であります。衣食住、安全、安心、環境、利便、効率といった事柄は人間の本能的で基本的な要求であり、それらに応えるような技術者の“自己満足ではない技術”、技術者の“心や心意気が籠もり、感じられる技術”が必要でしょう。

個人を見た場合、“組織の歯車”になることが悪であるような言い方がされた時期があったと思いますが、それは、個人に主体性がなく、惰性に任せて、動かされるまま生きる、消極的な姿勢が問われたのだと思います。しかし、考えて見れば、皆それぞれ社会、組織の一員であるので、社会あるいは組織がきちんと活動し、その役割を果たすためには、それに応えられる歯車としての存在も必要でしょう。その場合、単なる歯車ではなく、“考え、自転できる歯車”であることが必要でしょう。そのためには、個人、組織の“個の存在感の証である技術”を身に付けることであり、普段から五感を働かせ、問題意識を持ち、前向きに取り組むことだと思います。

最近、特に危惧しているのは、建設プロジェクトなど、新たな事業が減少しており、若手の技術者が技術を習得できる現場や学生が将来の目標とする事業が無くなりつつあることです。新たな事業は、それが動機となり、技術の開発、伝承及び人材育成、さらには前述の国威、活力の発現に結

びつくので、そのような場が無くなることを心配しています。このような事業の効用はB/C（費用対効果）には乗らないものですが、そのような視点による事業評価があってもよいのではないのでしょうか。技術の連続性が途絶えると、元の水準に戻るだけでも時間がかかり、困難が伴うので、“技術の継続、発展のための場”も意識することが必要でしょう。

将来の建設分野の展開の方向の一つとして“量から質への転換”が考えられます。維持・更新、安全・防災性の向上、既存施設の利活用化などは質の向上と言えるでしょう。例えば、地上構造物を地下化し、地上を活用する、水辺空間を復元、再生する、個別の構造物を複合化し、多目的利用化する…など、その可能性は広がりますが、新設にない、厳しく困難な条件が課せられることでしょう。しかし、“厳しさ・困難さ＝新たな技術の動機づけ”であり、そこに技術の活路、技術者の存在価値が見出せると言えます。

最後に、ユーザー、受益者である国民に対して、技術の研究・開発・普及の意義、必要性、効用について、積極的に、日常的に、それぞれの立場で発信することは、社会基盤インフラの創出と保全に対する正しい理解を得るためにも必要でしょう。

思いつくまま吐露しましたが、“技術の意義を再認識し、活性化”しましょう。